

なんでもむかし、あつたそうなわい

あるところに、馬子どんが、村から町へと、馬で荷物を運んで暮らしていました。あるとき、馬子どんは、

「正月も近くなったから、町へ出て、ぶりを買ってこよう」と思つて、出かけて行きました。

買つてきたぶりを馬に乗せて、山の中を歩いていると、やまんばあが見つけて、

「おうい、馬子どん、おうい、馬子どん。待つてくれえ」と呼びました。馬子どんは、

「なにを待つものか」といつて、馬を引つ張つて、どんどん逃げました。

やまんばあは、ぶんぶん追いかけて来て、

「おうい、馬子どん。そのぶりくれるか、馬をくれるか」といいました。馬子どんは、

「馬を取られちゃあ、どうにもならん。ぶりをやる」といつて、ぶりを後ろに投げました。そして、馬に飛び乗つて、どんどん逃げました。

やまんばあは、ぶりを食べてしまうと、また、

「おうい、馬子どん、おうい、馬子どん。待つてくれえ」とさげびました。馬子どんは、

「なにを待つものか」といつて、また逃げました。

やまんばあは、ぶんぶん追いかけて来て、

「おうい、馬子どん。馬をくれるか、おまえをとつて食おうか」といいました。

「わしが食われちゃあ、どうにもならん。馬をやる」

馬子どんは、馬を置いて、ひとりになつて、どんどん、どんどん逃げました。

すると、家が一軒いっけんありました。中にはだれもいません。

「よし、ここに隠かくれよう」

馬子どんは、天井裏てんじょううらに上がつて隠れました。

しばらくすると、そこへ、やまんばあが帰つてきました。

「やれやれ、ぶりも食つたし、馬も食つた。腹いっぱいだ。さて、餅もちでも焼いて晩飯に食おうか」

やまんばあは、いろりで餅を焼きはじめました。餅がふくらんでくると、やまんばあは、

「しょうゆをつけて食おうか」といって、しょうゆを取りに行きました。そのすきに、馬子どんは、天井の竹を引きぬいて、いろりの餅をくしょうんと突き刺して、とって食べました。

やまんばあが、しょうゆを持ってもどつて来ると、餅がありません。

「今夜は、火の神さんのきげんが悪くて、餅を食うてござるわい。もう寝よう。はあて、どこで寝ようかな。奥で寝れば奥くさいし、納戸なんどで寝れば納戸くさい。いっそのこと、釜かまの中に入って寝よう」

やまんばあは、そういうと、釜の中に入って寝ました。

馬子どんは、天井から下りると、軒下のきしたの大きな石を運んで来て、釜のふたの上にごさんと置きました。そして、火打石ひうちいしをコーツチコチ打って、釜の下に火を着けました。すると、やまんばあが聞きつけて、

「へえ、コチコチ鳥が鳴きました。もう夜が明けるわい」といいました。

そうしているうちに火が着いて、バンバン、バンバン燃えだしました。やまんばあは、「ふうん、バンバン鳥が鳴いたから、もう起きにやあならん」といいました。

そのうち熱くなつてきて、やまんばあは、

「熱い、熱い」と、あばれだしました。

馬子どんが、

「わしのぶりも馬も食ったからだ」というと、やまんばあは、

「おうい、馬子どん、馬子どん、ゆるしてくれ。馬も返すし、ぶりも返す」とさげびました。馬子どんは、

「なにを。食うてしもうた物は返せまい」といって、火をぶうぶう吹きました。

やまんばあは、焼け死んでしまいましたとき。

昔こつぱり、とびのくそ

村上郁再話

資料『ひるぜん 蒜山盆地の昔話』稲田浩二・福田晃／三弥井書店